

大阪史編纂所だより

大阪市史編纂所（発行） ☒ 第38号 大阪市史料調査会（編集）

平成24年3月発行

〒550-0014 大阪市西区北堀江4-3-2

大阪市立中央図書館内 Tel.06-6539-3333

●『新修大阪市史』史料編第7巻「近世Ⅱ政治2」を刊行しました

大阪市史編纂所では、2月に『新修大阪市史』史料編第7巻「近世Ⅱ政治2」を刊行しました。平成19年に刊行した史料編第6巻「近世Ⅰ政治1」が、大坂城代など江戸幕府の政治に関わる分野を取りあつかっているのに対し、本巻は市中の行政以外にも多様な任務をうけもっていた大坂町奉行とその下僚である与力・同心、摂津・河内・和泉・播磨の幕領を支配していた大坂代官、政治的機能も帯びていた各藩の蔵屋敷に関する新出史料約520点を掲載しています。商人の町と思われがちな江戸時代の大坂を多くの武士たちが支えていたことを明らかにする史料集です。購入をご希望の方は、主要書店または発売元である大阪市史料調査会（電話06-6539-3333）までお問い合わせください。（本体価格 5,500円）

●大坂代官の下僚 —手代・手付—

大坂代官は、摂津・河内・和泉・播磨の4ヵ国に散在する幕領（幕府直轄領）の村々を支配した幕府役人です。一般に代官の職務は、年貢徴収や民政を中心とする地方と治安・訴訟を中心とする公事方が主になります。さらに大坂代官の場合は、摂津・河内両国諸河川の国役普請の指揮・監督

や日常的な河川管理に携わる堤方と、全国各地に散在する幕領の年貢米を江戸や大坂に回漕する城米船を手配する廻船方の職務が加わりました。このように多岐にわたる大坂代官の職務を支えたのが、手代・手付と呼ばれた下僚たちです。

手代は代官支配地の有力農民や町人から雇用されました。彼らの中には華やかな生活を送る者や贈収賄等の不正癒着をする者が多く、しばしば処罰の対象になりました。そこで寛政改革期に、幕臣（御家人）からも下僚を採用することになり、手付が新設されました。

天保11年（1840）に出版された『大坂便用録』には、当時代官所のあった谷町・鈴木町各代官所の人員構成が掲載されています。谷町代官池田岩之丞および鈴木町代官築山茂左衛門を筆頭に、手付・手代の名前と役職が15人前後紹介されています。役職としては手付・手代たちの筆頭である「元メ」のほかに、「公事加判」「地方筆頭」「廻舟方」「堤方」などの名称が見られ、大坂代官の職務の実務担当者だったことがうかがえます。



春の大坂をゆく武士たち
『浪花百景』より「あみ島風景」



代官手代三枚義良の陣羽織(個人蔵)

さてこのたび刊行した史料編では、代官が有能な元メ手代を手付として登用することを願う書付や、検見の際便宜を図った手代を処分したことを示す史料など、代官の下僚をめぐる諸動向がうかがえる史料を掲載しています。他には幕末期に鈴木町代官手代を務めた三枚義良の史料を数点紹介しました。

彼は幕府による長州出兵の際、鈴木町代官支配の村々から徴発された人足を連れて、広島まで赴

いています。広島滞在中には、代官所の出入り商人である濱屋卯蔵と長田屋清七に胴服（陣羽織）を仕立てるよう依頼しました。これに対する濱屋・長田屋両名からの返書と、このとき仕立てたと推定される胴服が現存しています。黒色の羅紗地で、襟には福寿をあしらった錦布が使われるなど、豪華に仕立てられています。

これまで手付・手代たちの動向は、幕領の村々に残る地方文書や代官による記録から窺い知ることができる程度でした。特定の手代の動きがわかる史料は大変貴重です。ぜひお手にとって、幕末期を生きた一人の手代の息づかいに触れてみてください。（松本 望）

●在村の文人・木村小園



『かたるの記』夏の日の一コマ

まるで「鳥獣戯画」の一場面をみるような風景。この作品は、編纂所で調査中の木村好一家文書の一つである『かたるの記』に描かれたものです。この『かたるの記』は、送月亭主人なる人物が、文久3年（1863）の夏の日 of 出来事を詩と画であらわした画帖です。坐摩神社の夏祭りの

日、作者は大坂の「くたら町」（久太郎町の別称）の友人雪耕子を訪ねます。ところが、汗が肌を流れるあまりの暑さ。そこで雪耕子ともう一人の友人如石子と共に、船で現在の北浜あたりに納涼に出かけます。水遊びに興じていると、水の中に長さが一尋（約160cm超）もある竹の根を発見。その竹の根を振り回して友とふざけ合う様子を描いたのが文頭で紹介した画になります。さて、その後日、如石子宅を訪ねると、そこには例の竹の根が、盛り物の籠の手として立派に仕立てられていたのです。友人の風雅な行動に触発されて、送月亭主人は詩と画で、このエピソードを残したのです。ところで、ここで注目したいのは画帖に描かれた如石子宅のしつらえです。茶を楽しみながら歓談する様子が描かれていますが、そこに配置された品々を見ると、涼炉に水注、香立など煎茶の道具が並びます。画と煎茶をたしなみ、鳥羽僧正の画に言及するような作者は、なかなかの知識人と言えます。それでは、この画帖をつくった送月亭主人とはどのような人物なのでしょう。

送月亭主人こと木村小園は、河内国正覚寺村（平野区）の年寄役を勤める人物でした。『加美村誌』には、小園が国学を名和大年に、画を田能村直入に、漢学を藤沢東暎について学んだと紹介されます。さらに明治5年（1872）には、祥敬塾（のち橘島書院）を開き、国学と書道の普及に努めたことがわかります。小園の画の師匠、田能村直入は、南画の大家である田能村竹田に師事し、その名を継いだ人物で、幕末から明治にかけて京・大坂・堺で活躍した画家でした。直入はまた煎



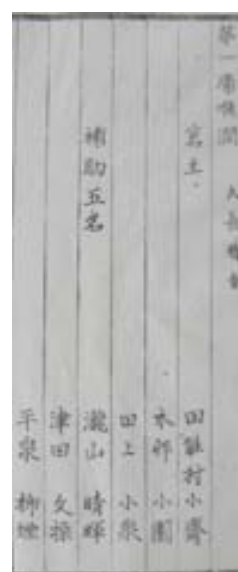
『かたるの記』煎茶のしつらい

茶の歴史においてもキーパーソンと言える人物です。文久2年（1862）の春、直入は、売茶翁^{ばいさおう}の百回忌を記念して、桜宮付近で青湾茶会^{せいわんちゃかい}という煎茶史上記念すべき会を開きます。この煎茶会では、7つの本席と4つの副席の計12席が設けられ、参加者が数千人にも及んだ一大文化イベントでした。その茶会の様子は、翌年に出版された『青湾茶会図録』^{せいわんちゃかい ずろく}に詳しく記されます。この書物を開いてみると、茶会第一席の茗主の補助者として木邨（村）小園の名前が見られるのです。

煎茶趣味は文人を中心に広まりました。大坂では、木村兼葭堂が煎茶の結社「清風社」を結成して活躍し、その友人である上田秋成も煎茶に造形が深く、『清風瑣言』^{せいふうさげん}という書物を著しています。この煎茶趣味の流れは、直入の師である田能村竹田に受け継がれていきます。『かたるの記』の作者木村小園は、この文人趣味の流れの中に生きた大坂近郊の文人と言えます。

木村好一家文書には、本画帖の他、『青湾茶会図録』をはじめ小園の文人

趣味がうかがえる蔵書が数点見られます。この『かたるの記』は、大阪の文
『青海茶会図録』より
木村の名が右から2番
目記されます。



こちらもぜひ！『大阪市史史料』48輯「大庭屋平井家茶会々記集一貯月菴宗従茶事会記録」

江戸時代の大坂を代表する両替商のひとりであった大庭屋平井家十代目の治郎右衛門美英が幕末から明治前期にかけて福島^{ふくしま}の別邸「貯月菴」で催した135回もの茶会の記録で、客人・道具立て・料理などが記されています。この時期の大坂の茶の湯について知ることのできる格好の史料であり、そのもてなしのありようからは大坂商人・町人の社交界の広がりや文化的素養の深さがうかがわれます。（平井克彦・市村祐子編、本体価格1,800円）

刊行物のお求め方法

大阪市史編纂所の刊行物は大阪市史料調査会で窓口・通信販売を行っています。また、下記の書店でお求めいただけます。詳しくは大阪市史料調査会（大阪市立中央図書館3階・電話06-6539-3333）までお問い合わせ下さい。

取扱い書店：旭屋書店(天王寺MIO店)、ジュンク堂書店(大阪本店・千日前店・難波店)、ミュージアムショップ文楽（大阪歴史博物館内）

絵はがきでみる昔の大阪（16）

・和光寺

■ 上方落語の「阿弥陀池」^{あみだいけ}「和光寺」でも有名です。伝説によれば、日本に仏教が伝えられたころ、^{もののべ}仏教を排する物部氏が難波の堀江に仏像を捨て、^{すいこ}推古天皇の時代に本多善光^{ほんだ よしみつ}が難波の堀江で、この仏像を得て、^{しなの}信濃に持ち帰り、寺を作ったのが善光寺であり、仏像を得たのが阿弥陀池であるというものです。

☑実際に堀江が開発されたのは元禄11年(1698)のことですが、その翌年の元禄12年に幕府から1800坪^{ちぜんだいおしょう}の寺地を得て、創建されたのが和光寺で、善光寺第113世の智善大和尚^{ちぜんだいおしょう}を迎えて本堂が建てられ、そこに善光寺からもたらされた仏像が安置されました。もともと念佛修行の寺のようなものが堀江の開発以前からあったようで、元禄9年に寄進された大きな手水鉢^{ちょうずばち}も残っています。大阪近辺の人は、信濃の善光寺は遠くて行けないが、善光寺とゆかりのある和光寺なら参詣できるというわけで、非常に多くの参詣人がいたようです。江戸時代には境内に様々な店や見世物・寄席などがあって賑わいました。和光寺の中に池があり、それを阿弥陀池、その池の中には放光閣^{ほうこうかく}という宝塔^{ほうとう}があり、なかには灯があって、常に消えないように保たれています。

☑昭和になってからも、近くに堀江遊廓があったこともあり賑わっていました。「堀江盆唄」もこのころに創作され、現在も歌いつがれ、踊り継がれています。和光寺の境内で行われた時には放送まもないラジオで実況中継され全国に放送されたこともありました。（堀田暁生）



【訂正】前号の本欄で、大江橋は「大阪市の指定文化財になっています」としましたが、大江橋は平成20年度に淀屋橋とともに国の重要文化財として指定されたため、平成14年度に行った市としての文化財指定は解除されています。また、26号「大阪ホテル」で、ホテルは大正11年（1922）に全焼したとしましたが、大正13年の誤りでした。以上、お詫びして訂正いたします。

▼「編集所のホームページに「今日は何の日」のコーナーを設けました。

『新修大阪市史』本文編の記述をもとに、平成7年（1995）3月までのできごと約3500件を紹介しています。みなさんの記念日には大阪で大阪でどんなことがあったのでしょうか。

<http://www.oml.city.osaka.jp/hensansho/nannohi/index.htm>